

# 幼稚園に於ける唱歌 (一)

堀 七 藏

一  
先づ現今幼稚園に於て廣く行はれてゐる唱歌を手當り次第に四十二を拾つて、その歌詞について調査した結果につき所感を述べます。それで是等の唱歌を順序もなく列擧いたしませう。

お月さんと遊ぼ。りすくこりす。青い眼の人形。月夜の兎。歌を忘れたカナリヤ。春が來た。お客様。凧。雪。雀。雛まつり。すみれ。時計。電車。かたつむり。木の葉。あてゝつないで。牛若丸。電車。雀の學校。大寒小寒。蓮の花。金太郎。水遊び。夕立。雀の子。池の鯉。どんぐり。ひよこ。鳩。鳩ぼつぼ。水兵。一寸法師。蝶々。お正月。螢こいこい。おもちゃのマーチ。春よこい。ゆり。ご。鬼さん。雨だればつりさん。ひばりは歌ひ。

是等四十二の唱歌の多くは遊戯が振付けせられて幼稚園遊戯として廣く行はれてゐるものが多いのであります。而して是等は歌の題として幼兒に適當なものもあり、あまり適當とも思はれないものもありま

す。大寒小寒などは不適當なもの、代表であります。また動物をよんだものが十二三で最も多いが、「りすくくこすり」は我國の幼児にはなじみが少ないものであります。歐米の子供には「りす」は大變に親密で、幼児と「りす」とは切離すことが出来ないものであります。しかし我が國の子供には左程ではありません。「りす」はどんなものか、見たことのないものが多いのです。「木鼠」であるといつても「りす」といつても、幼児には何等の感興がありません。元來動物の生活は幼児にとつて無限の興味があります。が「月夜の兎」などは全くの傳説であり、大人のもので、幼児にはあまり感興がありません。「黄金蟲は金持ちじや金倉建てた倉建てた、飴屋で水飴買って來た」などといふ歌に至つては大人のしやれで、子供には何等共鳴する所がないものであります。また「雀の學校」なども大人としては一寸面白くても、子供は雀を見て雀の學校の含む如き思想には共鳴をもつものではありません。「蝶々菜の葉に止まれ、菜の葉があいたらさくらに止まれ。さくらの花のさかゆる御代に、止まれや遊べ遊べやとまれ」などの歌詞になれば幼児には何のことか珍紛漢であります。また「ゆりかご」の歌が含む情景は全く幼児には不可解であります。我が國の幼児には「ゆりかご」は全く経験外であります。大人には面白くとも幼児には何等意味がありません。どうしても幼児の遊びで常に經驗するやうな題材がもつと精選せられねばなりません。

是等四十二首の歌詞の中に含まれるものを概略調べると玩具かまたはそれに關する語が二十ばかりあります。

セルロイド。黄金のうす。銀のきね。象牙。舟。かい。たこ。ひなだん。だいらさま。水てつぼう。こま。追羽子。玩具。人形。兵隊。キュービー。ぼつぼ。フランス人形。笛。太鼓

これ等の中セルロイドもフランス人形も幼児には無意味であり、黄金のうす、銀のきね、象牙の舟は全く想像、大人には面白くとも幼児には變なものでありませう。もつと玩具で幼児の感興をひくものが多いのでありますから、それ等から選擇せられねばなりません。

食物及び食物に關する言葉が僅に七つしかありません。お餅焼、麩、豆、うまい、たべる、御馳走、お土産であります。歌の題材として食物を取入れることが下品となるからでもあらうが、幼児の生活には食物に對する感興が多いからもつと取材をこの方面よりし、高尚な作歌が出来てもよいと思はれます。數量に關する語が十三、七、より、いつつ、六つ、七つ、一、二、三、四、一度に一緒に、位しかありません。十三七つも幼児には分らず、六つ七つも程度が高いのであります。専ら言葉から來た大人本位なものであります。

天文氣象等の現象に關するものが甚だ多いのであります。そしてその中には幼兒の觀念が明白でないものもあります。

お月様。月の光。月の世界。月夜の海。暗い。明い。おひがさす。かげ。赤い夕日。お空。朝日。光。きろろ。

くも。春。寒く。昨日。夜。雪。霰。降る。降り止む。今日。三月三日。風。朝。晚。落ちる。晴れる。大寒小寒。冬の風。いつのま。お正月。春の野山。山。里。野。野原。道。林。林。奥。ひびき。池。波。野道。橋。橋のらんかん。山奥。雷。電。夕立。そこ。音。暫く。何時でも。草の露。赤。青。あまだれ

であります。是等の中には月の光、月の世界、月夜の海、三月三日、大寒小寒、などは幼兒によく分りませんが、他は比較的幼兒の觀念界が明白であります。是等の現象はもつと歌の題材となつてもよいものであり、幼兒の共鳴する所のものでありませう。しかし兎角抽象的な高尚なものになり勝てありますから作歌のときには十分警戒せねばなりません。

動物に關した語が四十二首の歌詞の中に二十有五もあります。鳥、犬猫、かたつむり、角、あたま、めだま、くもの巢、くも、虫、こひ、餌、小鳥、おつむ、兎、つばめ、お口、鳥、ねぐら、くま、お馬、けだもの、雀の子、丸裸、しつぽ、池の鯉、ひごひ、どじょう、ひよこ、足、はね、はと、飛んで行く

鳴く、てふ、雀、螢、螢かご、わんく、きねずみ、ひばり。

是等の中、きねずみは一般に幼児が知らず、ひばりも見ることがないものであるが、他は幼児のよく知つてゐるもので、幼児の生活とは密接な関係をもつてゐるものが多いのであります。しかしもつこの方面の題材が幼稚園唱歌に取入れられて然るべきものであるが、作歌者には感興がないものか、今日の唱歌にはよいものが少いやうであるのが残念であります。

植物に關するものも少くないのであります。あんずの實、さんしょ、ぶどうのは、花、枯木、竹藪、桃、櫻、すみれ、草、のぎく、木の葉、れんげの花、おやぶ、まつも、しげるやなぎ、しだれる、どんぐり、豆、菜の葉、こずえ、ささ、桃の木、蕾、咲く、ふくらむ、びわの實、よめな、つくし、たんぼぼ、すみれ、れんげばな。

是等の中には幼児が一般に知らないものがあります。「さんしょ」でも「れんげの花」でも「よめな」でもまた「のぎく」でも幼児には知らぬものが多いのであります。「こずえ」などといふ語は幼児には全く無理であります。兎に角草花の中には幼児の遊びの材料となるものも多く、幼児にも愛らしいもの、好きな花として歓迎せられるものが多いから、成るべく是等の植物をとり入れた幼稚園唱歌が多く出来ることを希望せざるを得ないのであります。その他、方角に關する語や、學校、家庭などに關する語も少くないのであります。

うしろ。こちらへ。上。あんも。高い。あつち。こつち。あそこ。まへ。こゝまで。どこ。橋の上。前。後。右。左。こゝ。あちら。まんなか。あと。うら。こゝには。そこには。

あうち。皆さん。とうさま。かあさま。おへや。われらが。坊ちゃん。兄弟。ねどこ。うち。かあさん。學校。せんせい。むち。せいと。なかよし。屋根。家。のきば。せんろ。町。青い眼。アメリカアメリカ生れ。日本。港。綿帽子。こたつ。時計。やり。くつ。京の五條。なぎなた。扇。まさかり。足柄山。うちは。鼻緒。じょんぐゆりかご。つな。榮ゆる御代。フランス。

右の中には到底五六歳の幼児には不可解なものがあります。「榮ゆる御代」、「アメリカ生れ」、「日本の港」、「フランス人形」、「足柄山」、「京の五條」といつたものであります。お話を歌としたものには地名などの固有名詞が出るのは止むを得ないのでありますが、しかし成るべくならば省かれるにこしたことはないのであります。また是等中には幼児が耳なれない言葉もあります。のきば、じょんぐ、ゆりかご、われらが、等は幼児の知らぬものであります。尤も幼児が知らなくとも次第に知らせねばならぬ言葉は次第に教授するとしても、幼児の程度で理解し得る程度のものでなくてはなりません。

さて右に上げた四十二首の歌詞の中には動作に關することが非常に多いのであります。是等を注意すると中には一々説明すると共に、幼児に動作をさせて経験させねばならぬものが少くないのであります。歌ひ、あどる、うれし、とる、つむ、のびる、出せ、まはる、かゝる、吹かる、よつてくる、まふ、

ゆられる、つなぐ、行く、かはい、歌、鳴る、つむ、あつむにさす、だいの男、ふり上げる、めがけて、切りかゝる、とびのく、なげつける、こい〜、手をた〜く、思ふ、はやわざ、ちん〜、ごうごう、ごじゆんに、ねがひます、曲がる、御用心、ころぶ、ふり〜、も一度、一緒、わになる、泣く、開く、つぼむ、かつぐ、またがり、けいこする、あつめる。角力、水あそび、たくさん、くさ、しゆつ〜、ごろ〜なる、ざあ〜、きこえず、見えず、ふり〜、生える、羽が出る、出てこい、手のなる、さく、なげる、ころ〜、大變、喜んで、今日は、遊ぶ、やつぱり、困まらず、小さい、つよく、だかれる、ねむる、はなれて、やる、一度、そろつて、なく、起る、上げる、ふる、きれいな、マーチ、くり出す、せいぞろひ、やつとこ〜一まはり、とび出す、歩き初める、はく、出たい、ゆれる、夢、つかむ、人、鬼、ならぶ、拍子をそろへる、調子をあはせる、かくれんぼ、ジャンケン、かくる、出てくる、火をともし、にこ〜、涙、め、うかぶ、私、ことば、まいご、やさしい、ジョーチャン、仲よし、とぶ、つく、わすれる、さく、鳴く、御免下さい、ごきげん、お通り、大事な、かげん、えがほ、しんばい。お風、はやる、ねつ、あて〜、おあし、冷く、お目、ねる、たべず、あがれ、とぶ、ふる、つめる、かぶる、のこる、のこらず、喜ぶ、かけまはる、まるくなる、ひとり、さびしい、まつてゐる、たのしい、いける、くる、すぎ行く、のぞく、笑ふ、かつちん〜、おなじ、動く、ちつとも、おんず、まで、かうして、やすむ、やまず、いきをもつかず。

以上の言葉は大體幼兒にも分るものが多いのであるが、とき／＼幼兒に分らぬものもありませう。是等は幼兒の動作によつて言葉の意味を理解させるべきもので、説明すべき性質のものではありません。したがつて幼兒には理解出来ないやうな言葉を含まないやうに作歌せねばならず、また幼稚園唱歌として採用するときには十分幼兒の理解に適するか否を調査せねばなりません。只徒らに大人が面白いからといふ如きことで、幼稚園唱歌を選定することは禁物であります。今日幼稚園の遊戯が兎角幼兒の程度を顧ず、徒らに新奇を競ふ風があると共に、幼稚園唱歌にも程度の高いものが多いことは誠に警戒せねばなりません。何でも程度の高いものを教へて得意とすることは幼稚園保育の精神に反するものといはねばなりません。幼稚園令施行規則第一條に於て特に

「幼兒の保育は其の心身發達の程度に副はしむべく其の會得し難き事項を授け、又は過度の業を得さしむることを得ず」

と注意してゐる點を三省せねばなりません。唱歌を選択するに當つても十分幼兒の發達程度を考へねばなりません。只徒らに新作なるが故に教へるとか、保姆自身に面白いから教授するといふが如きことは十分さげねばなりません。満四五歳の幼兒の唱歌であるからその程度で出来るもの、或ひは多少努力すれば相當よく唱歌することが出来、しかも幼兒がその唱歌によつて精神を健全に發達するものでなくてはなりません。